

編輯後記

◇能の專用語にクツログ（或はクツログ）といふ言葉がある。甚だ雅味のあるいゝ詞だと思ふ。これは演者が動きの上から、或は段取の上から一旦後見座へ退き、下に居て暫く静止するのを云ふのである。又常座邊へ行つて氣を變へ、次の謡や次の動きを待ち合はす場合にも云ふのである。又早舞物の小書にもクツログと云ふのがある。舞の中で橋懸へ行き、暫く休止する個處があるのでこの名がある。字を當てれば寛の字であらうが、能の方では寛の字を用ゐてゐる。寛は靜かの意である。動に移る前の靜である。伸びんが爲に先づ屈しておくのである。破の前、急の前の序である。精神的にも肉體的にもクツログがなければならぬ。國民生活の上に精神的クツログを與へるものは文學であり、美術であり、藝能である。古の名將は陣中に舞を舞ひ、詩を賦し、或は茶を立てた。それらは明日の血戰を豫約するクツログであつた。

◇全文學者に依る日本文學報國會が結成され首相を始め、情報局總裁、陸海軍報道部代

表者も其式に列席し、それぞれ祝辭を陳べられ、實に意義ある、また感動深い出来事であつたやうである。これまで謂はゞ仙人扱ひされたやうな文學者なるものが經國の當事者から改めて見直されたことは、私達にとつても近頃稀な心からの欣びであつた。斯して今後文學は、藝術は、愈々國民と手を取り合ふばかりでなく、國家とも手に進するであらうことを疑はない。

◇本號は先般京大文學研究會に演奏された古親太夫の「道明寺」を取上げて特輯とした高安、中野、鴻池、森、それに新同人辻部祐田の六氏が各自の觀點から執筆された。今後も何か研究課題を設けて、新舊同人諸氏の卓説を蒐めてみたいと思つてゐる。太宰氏の「佛蘭西古典悲劇研究」は早くから原稿を頂いてゐたが編輯の都合で次號に繰返べとなつた、悪しからず御諒承を乞ふ。内容の充實に何よりも力を盡してゐるが、表紙の體裁も齋藤清二郎氏の案に基いて面目を一新することにした。

（編輯部―林、大西、森）

淨瑠璃雜誌 第四百十號

（昭和十七年六月號）
（毎月一回三十日發行）

定價 本 一 部 金五十錢
半 部 金三十錢
外 國 寄 附 金五圓

○御注文は一切前金の事
○雜誌發送を以て領收證に代ゆ
○外國寄附は一冊に付郵税十錢を要す
○摺寫は浪花名物淨瑠璃雜誌社。
○座穴版二九二八番

廣 告 料

普 通 一 行 金三十錢
二 等 一 行 金二十錢
一 等 一 行 金二十錢
特 等 一 行 金三十錢

○特等は二頁以下の需に應ぜず六回
○製版を要する時は其貨費を申受く
○廣告料は總て前金の事
○一行九ポイント活字

發行所 極口虎之助
編輯人 坂口秀吉

印刷所 高尾印刷所
發行所 淨瑠璃雜誌社